

官報報告

宗

宣下 明治五年三月四日

宗義總裁

宗義主事

大臣

子勳

次官

宗

南部次郎特旨ヲ以テ從五位
宣下ノ件

同覽
五年三月六日

九
五
三
六

明治五年三月二日裁可三月二日達
臺帳記入三月四日官報報告濟

官内省

裏面白紙

丙
一三二二

明治五年三月二日
大藏 明治 年 月 日

宗秩寮當道

當番書記官



案

特旨ヲ以テ位記ヲ賜フ

南部次郎

叙從五位

右之通本日 宣下相成候條以旨及傳達
候位記並辭令ハ明後日可及回送候也

明治四十五年三月二日

宗秩寮總裁候爵久我通久

從五位南部次郎 殿

本件係
中綴内

282

南 部 次 郎

南 部 次 郎

南 部 次 郎

南 部 次 郎

南 部 次 郎

成候條以肯及傳達
後日可及回送候也

二日

總裁候壽久我通久

殿

282

本件傳達書に左記の如く送附ありたり
中略内不書記及び存札あり
南 部 次 郎 印 大 日 時 敏



南部次郎
特旨ヲ以テ位記ヲ賜フ
南部次郎

叙從五位
右謹テ奏ス

明治四十五年三月二日

内

閣

内閣總理大臣侯爵西園寺公望望

明治四十五年三月二日

内閣書記官



内閣總理大臣 望

内閣書記官長 小

南部次郎ハ舊盛岡藩士、間ニ重望アリ
夙ニ藩政ノ革新ニ盡カシ、尋テ幕府大
政奉還ノ際、奥羽列藩ノ同盟シテ朝命
ニ抗スルヤ奮然起ツテ勤王ノ大義ヲ唱
ヘ同志贈正五位中島源藏同日時隆之
進等ト共ニカヲ戮セテ備ニ苦楚ヲ嘗メ

内閣

能ク藩論ヲ一定シテ其嚮ヲ所ヲ誤ラシ
メス、遂ニ自ラ進ニテ藩、使命ヲ帯ビ道
途ノ梗塞ヲ凌キテ進ニ京都ニ上リ親
シク中山澤廣澤諸卿ニ謁シテ藩情
ヲ白シ、奥羽ノ列藩ニ率先シテ藩主入
京ノ允許ヲ得タリ、其間藩ノ執政トシテ
國事ニ奔走シ、尋テ藩主南部氏ノ知
事ニ任セラル、ヤ大参事ヲ以テ之ヲ佐ケ
遂ニ藩主ヲシテ藩籍奉還ノ魁タラシメ
タリ、廢藩置縣ノ際ニハ奥手ケラレテ大参

事ニ任セラレシモ固辞シテ就カス爾後時
 勢ニ察スル所アリ民間ニ在リテ或ハ物産
 高會ヲ興サシメ或ハ鐵道ノ創設ヲ唱
 ヘ殊ニ意ヲ清國ノ事ニ用キテ夙ニ征臺
 ノ役アリシ當時ヨリ出テ、清國ニ遊ヒ尋
 テ蒙古ニ入りテ隣邦交誼ノ為メニ畫策
 スル所少カラス其國事ニ竭シタルノ功勞
 洵ニ顯著ナルモノアリ目下既ニ齡七十八
 歳ニ達シ病氣危篤ニ瀕スル趣ニ付此
 際舊功ヲ録セラレ特旨ヲ以テ從五位ニ叙
 セラレ然ルヘシ

内閣

南部次郎

天保六年九月十七日生

右南部ヲ藩政ノ革新ニ盡力シ幕府
大政ヲ奉還ニ方リ奥羽列藩同盟ノ約
アルヤ奮然勤王ヲ唱道ニ備
苦楚ヲ嘗メ藩論ノ嚮フ所ヲ誤ラシメ
ス終ニ該藩ヲシテ藩竹藉奉還ノ魁ヲ為
サシムルに至リ爾後時勢ヲ察シ物産
高會ヲ興サシム或ハ鐵道ノ創設ヲ唱ヘ又

内務省

ハ清國ニ遊ヒ畫策スル所アリ此他隱然
國家ニ貢獻セシ功勞洵ニ顯著タリ
認ム其事蹟ハ別紙傳記ニ詳悉セル
通ニ有之然レ本人目下病氣危篤ニ
瀕シ候ニ存生前相當叙位ノ恩典ニ浴
セシメラレ候様申詮議相成度此段具申
候也

明治四十五年三月一日

内務大臣 原

敬



内閣總理大臣侯爵西園寺公望殿

内務省

287

南部次郎政圖之傳

東野

南部次郎政圖ノ傳

南部次郎政圖ハ幼名ヲ繼彌ト呼ビ後ニ中務ト稱セリ南部侯名ヲ賜フテ更ニ次郎ト稱セシメラレタリ而シテ自ラ龍ト名ツク字ハ襄雲應齋ト號ス曾テ東氏ト稱セシモ晩年ニ至テ南部氏ニ復セリ天保六年九月十七日ヲ以テ陸奥國三戸郡沖田面村ノ采地ニ生ル容貌魁梧ニシテ眼光人ヲ射ル長スルニ及ビ好ミテ聖王ノ道ヲ講シ學識超然トシテ時習ノ漆ムル所トナラス其志固ヨリ三代以上ニ在リ然リ而シテ其ノ世ニ處スルヤ起外掛常ナク榮枯屢々易ハリ終ニ不過ヲ以テ東京ニ老ニ親戚故舊モ其ノ短ヲ知テ而シテ其ノ長ヲ知ル者鮮シ蓋シ知ラレスレテ而シテ反テ其ノ大ヲ見ル者歟謹シ家譜ヲ案スルニ其ノ先ハ新羅三郎義光ノ曾孫加賀見次郎遠光ヨリ出ツ遠光ノ三男ヲ南部三郎光行ト云ヒタリト任シテ甲斐ノ國南巨摩郡南部村ニ在リシカハ因テ南部ヲ氏トセリ源ノ頼朝義兵ヲ石橋山

ニ舉タルヤ光行直チニ馳セテ軍ニ從ヒ奮
 戦功有リ他日頼朝之ヲ賞シテ陸奥ノ國糟糠
 壁郡ヲ賜ハレリ光行陸奥ノ國ニ到リテ地
 ヲ三戸ニ相シ城ヲ築キテ名ヲ錦臺城ト命
 シ而シテ自ラ之レニ居レリ此レヲ伯爵南
 部氏ノ始祖ト為ス其後岩手郡不米方村ニ
 移リテ居城ス之レヲ不米方城ト曰フ即チ
 盛岡城是ナリ光行ノ長男ヲ實光ト曰フ統
 ヲ承ケテ父ノ後ヲ繼ケリ次男ヲ南部次郎
 政行ト曰フ八戸ノ豪族工藤將監祐繼之ヲ
 養フテ子ト為シ妻ハスニ其ノ女ヲ以テシ
 遂ニ工藤氏ヲ繼ケリ祐繼ナル者ハ工藤左
 衛門ノ尉祐經ノ後ナリ世々郡ノ名久井館
 ニ居リタリキ政行ノ工藤氏ヲ繼キシヨリ
 以来人呼ヒテ東氏ト曰ヒテ工藤氏ト曰ハ
 カリキ其館カ三戸城ノ東ニ在リシヲ以テ
 ナリ此レ則チ東氏ノ先祖ニシテ政圖ノ家
 ナリ政行ノ子孫相繼キシモ其祀遂ニ絶エ
 タリ
 是ニ於テ南部侯太膳ノ太夫義政其ノ三男

ヲ以テ之ヲ繼カシム東三郎信政ト曰ヒタ
リキ信政六代ノ孫ヲ東中務ノ尉直義ト曰
フ南部侯晴政女ヲ以テ之ニ妻ハセラル直
義二男アリ重義ト曰ヒ胤政ト曰フ重義病
有リシハ胤義統ヲ繼ケリ南部侯利直女
ヲ以テ胤義ニ妻ハセラルシニ胤義早ク卒
シテ侯ノ女尚少カリシカハ侯乃チ毛馬内
直次ニ命シ其二男直胤ヲ以テ之カ夫婿ト
ナシ以テ東氏ヲ繼カシメラレタリ之ヲ東
左京直胤ト曰フ直胤子無カリシカハ重義
ノ庶子二歳入りテ東氏ヲ繼ケリ名ヲ亀松
ト曰フ南部侯之ヲ城中ニ邀ヘテ養育セラ
レタリ而シテ名久井館ノ領地三千石並ニ
士三百人卒百五十人ハ擧ケテ皆南部侯ニ
直屬セシメラレタリ曰ク亀松ノ長スルヲ
待チテ之ヲ還ヘラント亀松元服シテ名ヲ
政義ト改メ祿二百五十石ヲ給セラレ後増
シテ之ヲ倍シ近侍頭ニ擢ラレタリ又千石
ヲ給シテ執政ニ陞任セラル此ヲ東氏中興
ノ祖ト為ス而シテ東氏從來ノ土地士卒ハ

一旦南部侯ニ直屬セラレタルマ、ニテ竟
ニ復タ還ラス
政義五代ノ孫ヲ南部勘解由政智ト曰ヒタ
リキ始ノラ東氏ヲ廢シテ南部氏ニ復セリ
其子ヲ政方ト曰ヒ其孫ヲ政博ト曰フ政博
ノ登城シテ正ヲ賀ス南部侯名ハ利濟信濃
守ト稱シ官少將タリ自ラ出ラ、酒ヲ賜フ
席次政博ヲ先トナス而シテ執政横澤兵庫
ハ政博ヲ待タスレテ首トシテ進ミ杯ヲ料^拜
ス政博以テ家門ノ辱ト爲セリ兵庫ハ本ト
賤士ヨリ出テタル者ナレハナリ政博ニハ
之ヲ爲メ歸途輿中自ラ屠腹シテ死セリ兵
庫聞テ之ヲ惡ミ其家祿ヲ没シ且ツ南部氏
ヲ稱スルヲ禁セリ政博ハ即チ政圖ノ父ナ
リ政圖時ニ甫メテ五歳名ヲ繼彌ト曰フ是
ニ於テ再ヒ東氏ヲ稱スルコト、ナレリ母
繼彌ヲ携ヒテ備サニ難苦ヲ嘗メ以テ之ヲ
鞠育セリ七歳ノトキ館及祿三百五十石ヲ
賜ハリ十五ノトキ元服シテ東中務政圖ト
稱シタリキ此ノ年信濃守ハ退隱セラレテ

子利義之代ハラレ甲斐守ト稱シ官侍從
タリ甲斐守月ヲ出テスレテ退隱セラレ弟
利剛之代ハラレ美濃守ト稱シ亦侍從タ
リ明年中務十六ノトキ仕ヘテ近侍トナリ
十八ノトキ家格舊ニ復シテ位上士ノ上ニ
在リ五百石ヲ領シ近侍頭ニ任シ幾ハクモ
ナク執政候補ニ晋ミタリ
明年土民蜂起シテ乱ヲ作セリ侯執政ニ命
ジテ之ヲ鎮撫セシメントセラル、モ執政
皆辭シテ存セス執政猶山佐渡進ニ出テ、
曰ク請フ首トシテ三奸ノ民ノ怨府トナル
者ヲ斥ケ然ル後命ヲ拜セント侯怒ヲ盡ク
執政ヲ罷メテ復タ一人ノ存スル者ナシ
侯中務ヲ召シテ直テニ執政ヲ命シ且ツ曰
ク卿宜シク塩梅スヘシト中務時ニ年十九
乃チ南部主計ヲ召シテ鎮撫使トナシ南部
彌六郎ヲ大老トナシ猶山佐渡ヲ再ニ執政
トナシ且ツ首席ヲ讓レリ具中務ヨリ四歳
ノ長者ナルヲ以テナリ而シテ三奸ノ家祿
ヲ没收シ併セテ叛民ノ主謀七人ヲ斬リテ

以テ事全ク平ケリ幕府ハ侯ヲ諱スルニ善ク國事ヲ理メサルヲ以テシ慎ミテ屏居セシノラレ且ツ伊東修理太夫（日向沃肥ノ藩主而シテ侯ノ親族）及南部但馬守（陸奥七戸ノ藩主侯ノ支家）ニ後見職ヲ命セラル中務議シテ曰ク我侯ノ諱ヲ蒙ルハ則チ之ヲ聞ケリ而カモ後見職ヲ置カレタルハ乃チ國ノ辱ナリトテ哀ク後見職ニ乞ヒ以テ辭職セシメントセシモ議遂ニ行ハレサリキ

佐渡ハ江戸ニ上リテ以テ外交ヲ修メ中務ハ居テ國政ヲ修ムルコトナレリ而シテ中務ハ先ツ中外ヲ肅清スルノ計ヲ定メ大矢勇太横濱七郎ヲ大目付トナシ島川結城戸田權太夫下戸米深ヲ納戸頭トナシ目時隆之進平山郡司ヲ町奉行兼郡奉行トナシ奈良宮司照井小平ヲ會計主任トナセリ當時昏才ヲ以テ聞ユル者ナリキ然ル後内廷職ヲ免スル者數百人留マル者僅ニ八人ノミ外廷モ亦淘汰ノ行ヒ目附及徒目附ヨ

リ諸小吏ニ至ルマテ免職スル者亦數百人
又地方代官ノ數ヲ省キ且ツ其代官ハ皆人
才ヲ選ミテ情弊ニ拘ハラヌ又債券ヲ燒キ
盡シテ以テ士ノ借款ヲ免セシメタリ而シ
テ明義館ヲ興シテ文武ヲ兼テ修メシム文
學ハ則チ那珂五郎照井小作ヲ以テ之カ教
授トナシ武藝ハ則チ菊池鯉之助足澤佐十
郎等ヲ以テ之カ教授トナセリ後チ文武ヲ
別チ武藝ハ則チ明義館ニ在リテ之ヲ講シ
而シテ流派ヲ問ハヌ以テ相闘ハシメ始メ
テ實戰ノ用ヲ為サシム文藝ハ則チ作人館
ヲ設ケテ之ヲ講シ那珂主トシテ詩文ヲ教
ヘ照井主トシテ經學ヲ教フ以テ育英ノ事
ヲ務メタリ又甲斐守ノ黨江幡春奄（那珂
五郎ノ兄）島川瀨織等十八人ノ囚レテ獄
中ニ在ル者ヲ免セリ初メ春奄等ハ兄ヲ廢
シテ弟ヲ立ツルノ議アルノ間キ甲斐守ノ
為メニ美濃守ヲ除カント欲シテ罪ニ坐ス
ル者ナリ中務ハ其ノ志ヲ諒トシ侯ニ説キ
テ曰ク仇ヲ忘レテ之ヲ用ユルニト宜シク

桓公ノ管仲ニ於ケルカ如クスヘシト侯遂
ニ之ヲ聽ルニ是ニ於テ黨人皆赦サレタリ
但夕春菴ノミ未夕獄ヲ出ツルニ及ハスレ
テ死セリ中務ハ年少氣銳ニシテ國政ヲ草
新スルヲ急ナルカ為ノ一時非常ノ事ヲ決
行シ以テ衆ノ耳目ヲ聳動セリ故ニ毀譽交
々一身ニ集マレリ
中務ノ佐渡ト更迭ヲ相為シテ其ノ江戸ニ
上ルヤ先夕西後見職ニ説キ勸レルニ辭職
ヲ以テセシモ西後見職口ニハ之ヲ諾シテ
心ニハ之ヲ肯レセス隨テ議ノ遲延ヲ免レ
ス中務乃チ屢々論難シテ遂ニ辭職セシメ
以テ國ノ面目ヲ復セリ而シテ佐渡ハ國ニ
歸ルモ革新ノ後ニ在リテ復夕一事ノ為ス
可キナク快々トシテ樂マス病ト稱シテ遂
ニ辭シ私ニ中務ノ專横ヲ憤レリ諸人ノ職
ヲ免ヒテハ者ハ皆佐渡ニ黨シテ中務ヲ
痛罵セサルハナシ衆口金ヲ鑠セシカハ侯
モ亦惑ハレタリ中務國ニ歸リテ其不可ナ
ルヲ見レヤ亦執政ヲ辭セリ時ニ年二十六

佐渡ノ出テ執政ト為ルヤ士ノ祿三分一
ヲ借ル曰ク祿ヲ借ルコト三年以テ財政ノ
基ヲ建テント遂ニ之ヲ斷行セシモ而カモ
三年ニシテ猶止メス且ツ増シテ十分ノ七
ト為レ更ニ借ルコト七年ノ久シキニ延ヘ
ントス一藩皆之ヲ病ム他ノ執政等モ亦之
ヲ欲セス乃チ中務ヲ薦メテ執政ト為シ以
テ佐渡ニ抗レテ其議ヲ罷メシメント期シタ
リキ是ニ於テ中務再ヒ執政ニ任セラレ時
ニ年二十九首トシテ借祿ノ不可ヲ唱ヒ大
ニ佐渡ト相争フ佐渡曰ク君公ノ面前ニテ
各々其ノ説ヲ陳ヘ以テ君公ノ取捨ニ聽カ
セント乃チ君公ノ面前ニ出ツ佐渡曰ク國
家事アレハ必ス財政ニ須タサルナシ今權
道ヲ取テ以テ祿ヲ借ル者ハ財政ノ基ヲ建
テ以テ有事ノ日ニ備ヘンカ為メナリ有事
ノ日ニ備ヘスレテ可ナラハ何ソ必スシモ
祿ヲ借ルコトヲ之レ為サント中務曰ク國
君ハ當サニ士ヲ養フヘシ今士ニ就テ祿ヲ
借ルハ何等ノ失体ソヤ若シ財政虧ルアリ

ト曰ハ、須ラク自ラ節約スヘシ、禄決
シテ借ルハカラス況ンヤ今日將ニ大ニ士
ヲ用ルルノ秋ニ於テラヤ曩ニ德政ヲ行ヒ
以テ士ノ借款ヲ免スル者ハ亦遠慮アリテ
以テ權道ニ出ツレハナリ如シ士ノ禄ヲ借
ラハ則チ德政ト矛盾スルノミナラス且ツ
士ヲ困シマシムル者安レク能ク士ヲ用ル
ント侯ノ曰ク我レ艱苦ヲ忍ヒ自ラ節約ヲ
加ヘン財政乏シキヲ告グルモ復タ禄ヲ借
ル勿レト佐渡乃チ執政ヲ辞シ其黨モ亦皆

辞シ去レリ

侯ハ國政ヲ舉ケテ再ヒ中務ニ任シ且ツ名
ヲ次郎ト賜ヘリ則チ先祖南部次郎政行ノ
名ヲ襲カシメラレタルナリ次郎先ツ財政
ニ就テ大ニ節約ヲ行ヒ從來ノ歳出七萬兩
餘ヲ減シテ壹萬兩餘ト爲シ以テ國事一
切ノ諸費ヲ辨シタリキ侯喜ヒテ章服ヲ賞
賜セラル而シテ大矢勇太奈良官司照井小
作等ノ事務ニ服スル者ニモ亦各々賞アリ
キ次郎又國中ニ令シテ濁酒ヲ除ク、外民

ノ一切酒ヲ造ルヲ禁セリ是ニ於テ一歳ニ
シテ米十二萬石ヲ餘シ價モ亦隨テ廉トナ
レリ乃チ餘米ヲ舉ケテ盡シ之ヲ買收シ而
シテ國中ノ各地ニ貯蔵シ以テ不虞ノ變ニ
備エシノ然ル後造酒ノ禁ヲ解ケリ
南部監物一日侯ニ謁シテ曰ク東次郎ハ專
横自大曾ヲ臣ト云ヘルコトアリ曰ク君ヨ
リモ社稷ヲ重シトス我輩兩人ハ辱クモ門
族ニ列ス苟モ大事ニ臨マハ則チ英斷ヲ行
ヒ以テ自テ責ニ任スルコト無クシハアル
ヘカラスト侯ヤ今ニシテ之ヲ抑エヌンハ
恐クハ他日制スヘカラサルニ至ラント侯
乃チ次郎ノ異志アルヲ疑ヒ陰ニ近臣ニ命
シテ具舉動ヲ偵ハシム横濱七郎モ亦内旨
ヲ蒙レリ而シテ次郎ノ夙詛ヲ重シシ自テ
来リテ實ヲ告ケレカハ次郎乃チ執政ヲ辞
セリ時ニ年三十
次郎曩キニ江戸ニ在リテ櫻田ノ變ヲ目撃
シ心ニ期スラク國ニ歸リナハ大ニ武備ヲ
修メント而シテ其ノ國ニ歸ルヤ幾ハクモ

無クシテ職ヲ去リ再ヒ出ツルモ亦然リ故
ニ武備ノ如キ未タ全ク國中ニ普及セズ是
ニ於テ三戸ノ采邑ニ帰リテ演武場ヲ設ケ
盛ニニ武藝ヲ講シ兼テ文學ヲ修メシニ遠
近風ヲ聞キテ聚マール者日ニ三千人ノ多キ
ニ至レリ
執政ノ花輪圖書ハ南部監物ト相謀リ各地
貯蔵スル所ノ米ヲ發賣シ以テ高業ノ資ト
作セリ而シテ其高業敗ヲ取リテ大ニ其資
ヲ失ヒタリキ次郎之ヲ聞テ痛憤ニ堪エズ
後々二年國中ニ令レテ曰ク時局ノ變舊套
ヲ襲ヒ難シ人貴賤トナク各見ル所ヲ言ハ
ト次郎乃チ城ニ入り侯ニ見エ以テ策ヲ献
セント欲ス圖書問フテ曰ク今日言ハント
スル所ハ何等ノ事ソ次郎曰ク幕府將ニ立
ヒレントス今其幕府ニ頼テ恬然自ラ安スル
可ナラシヤト圖書曰ク幕府豈ニ遽ニ立ノ
ルモノナラシヤ何ヲ狂妄ノ言ヲ弄スルヤ
ト乃チ之ヲ阻止セリ次郎曰ク我レ執政ニ
因テ進謁セントスルモノハ此レ執政ヲ敬

スレハナリ而ルニ執政之ヲ阻止ス我レ乃
チ自ラ往テ謁セン是レ我カ家格ノ許ス所
ナリ何ヲ必スレモ執政ヲ介スルヲ要セン
ト圖書曰ク侯ヤ故アリテ面見ヲ許サスト
次郎曰ク何故ヲ圖書曰ク知ラス次郎怒ラ
曰ク苟モ國家ノ大事ヲ言ハントスルニ國
君拒テ見エス豈ニ國君職ヲ曠ウスルモノ
ニ非サランヤ子等執政盍レク之ヲ匡輔セ
サル况ンヤ國中ニ令レテ以テ各見ル所ヲ
言ハレムルニ於テヲヤ而ルニ今其ノ見エ
サルノ故ヲ知ラス君臣俱ニ職ヲ曠ウスル
モノト謂フヘシト圖書乃チ入テ故ヲ問フ
出テ、曰ク侯ノ子ヲ見サル者ハ子ノ異志
アルヲ疑フテナリト次郎侯ニ見エ以テ其
ノ冤ヲ明サント欲ス圖書爭テ聽カス大矢
勇太等出テ、次郎ヲ慰メテ曰ク貴説理
アリ而カモ今強ヒテ侯ニ見ント欲スルハ反
テ不利ナリ請フ速ニ辞シ去レト次郎將ニ
退カレトセシニ突トシテ捕吏アリ出テ来
テ手ヲ捉ヘ擁シテ輿中ニ入ラシム而シテ

途ノ警衛ヲ嚴ニシテ送テ自邸ニ至リ遂ニ
閉居ヲ命シ且ツ親族ヲシテ看守セシム又
家格ヲ降シテ中士ト爲シ而シテ南部氏ノ
徽章ハ則チ禁シテ用井レヌ蓋シ圖書等
ハ次郎カ武ヲ講シ衆ヲ聚ムルヲ見テ其不
軌ノ舉ニ出ツルヲ疑ヒシナリ
次郎閉居ノ後母大患ニ罹レリ其ノ瀕死ヲ
聞クヤ乃チ自ラ室ヲ出テ親シノ病床ニ侍
ス執政之ヲ聞テ痛ク親族ヲ責メ遂ニ室ヲ
鎖シテ牢ト爲シ而シテ看守ノ人ヲ増セリ
次郎表ヲ上リ母ノ病ヲ看テ以テ孝道ヲ全
ウセント乞フ執政旨ヲ下シテ默許ス因テ
側ニ在リテ日夜看護スルヲ得タリ而シテ
母遂ニ起タマ次郎乃チ囚人ヲ以テ喪ニ服
セリ豈ニ大ニ哀レカラヌヤ
次郎牢居中ニ在テ師ヲ聘シ以テ學ヲ講セ
レト欲ス而カモ人皆其聘ヲ謝絶セサルナ
シ其ノ囚人タルヲ嫌フテナリ惟、照井小作
之ニ應シテ曰ク聖賢ノ道ハ囚人モ亦可ナ
リ但、其ノ人ニ在ルノミト小作ハ即チ小平

ノ子ナリ謂ユル照井先生是レナリ先生ノ
學ハ徂徠ヨリ進ミテ而レテ徂徠ヨリモ大
成スルモノナリ支那ノ章炳麟其遺書ヲ讀
ミ跋ヲ作りテ評シテ秦漢後ノ一人ト曰ヘ
、次郎、學識超衆以テ經世ノ旨ヲ得タル
者、則チ先生ノ説ヲ聞キタレハナリ蓋シ
先生ノ門人中文學ヲ以テ勝ルモノハ大田
代恒徳ニ如クハナク而シテ政事ヲ以テ勝
ルモノハ次郎ニ如クハナシ此ノ二人ノ者
ハ照門ノ聯壁ト謂フヘヤナリ

侯ハ近侍頭野々村真澄ヲレテ手書ヲ帶ヒ
至ラシメテ曰ク寡人卿ヲ見レト欲ス而シ
テ執政之ヲ拒ム故ニ書ヲ以テ問フ寡人再
ヒ卿ヲ起ヤント欲ス未タ知ラヌ卿能ク建
議ヲ罷ルルヤ否ヤト次郎對ヘテ曰ク臣辱
クミ門族ニ列ス國ノ大事ヲ傍觀シテ可ナラ
レヤ若レモ建議セサルヲ以テ臣ヲ用ヒラ
ル、トセハ臣將タ何ノ用ヲカ之レ為サン
義敢テ罷命ヲ受ケスト真澄懇論スレトモ
竟ニ聽カス

乃子次郎ヲ他ニ移シ而シテ宰居ヲ釋ルニ
改メテ蟄居ヲ命セリ此ノ時ニ當テ幕府大
政ヲ奉還ス朝廷乃チ南部藩ニ命シ速ニ目
代ヲ出シ以テ京都ニ上ラシム藩ハ橋山佐
渡ヲ以テ正使ト為シ目時隆之進ヲ副使ト
為シ而シテ中島源藏ヲ監督ト為シ馳セテ
京都ニ赴カシム隆之進私ニ次郎ヲ訪フテ
曰ク此ノ行必ス佐渡ヲ説キ以テ藩論ヲ勤
王ニ定メテ歸ラシム請フ私怨ヲ去リ出テ、
佐渡ト共ニ國事ヲ謀レト隆之進及源藏等
ハ本ト次郎ニ從テ勤王ノ説ヲ聞ク者故
ニ來テ近状ヲ告グルナリ次郎之ヲ諾シ以
テ吉報ヲ待テリ
目代ノ一行未タ歸藩ニ及ハサルニ鎮撫使
早ヤ已ニ東下シ奥羽列藩ハ乃チ同盟ヲ約
シ以テ鎮撫使ヲ逐ヒ鎮撫使秋田ニ逃走セ
ラレタリキ次郎上書シテ曰ク我藩宜ク鎮
撫使ヲ迎ヘテ以テ奥羽同盟ヲ破ルヘシ我
花卷城小ナリト雖モ以テ同盟軍ニ抗シテ
戰フニ足ル候ト鎮撫使ト花卷城ニ據ル可

ナリ且ツ秋田ヤ津輕ハ皆官軍ニ應セリ我
レ則チ後顧ノ憂アルコトナシ何ヲ計レ此
ニ出ラカルヤト執政南部監物書ヲ見テ色
ヲ作シテ曰ク此レ我藩論ヲ擾ルモノナリ
ト焚毀シテ省セス
又野田練平ヲ以テ特ニ藩使ト為シ目代一
行ヲ追尾セシメ告クルニ藩論ノ奥羽同盟
ニ決スルヲ以ラセリ是ヨリ先キ目代ノ一
行三條岩倉公等ニ謁見シテ説ク聽キ情ヲ
察セシニ佐渡ハ公等ノ新政ヲ疑ヒ且ツ危
ニ居タルニ會藩使アリテ命ヲ傳エシカハ
佐渡乃チ藩論ニ從エタリ隆之進佐渡ヲ苦
諫スレトモ而カモ其ノ聽カサルヲ見テ之
ヲ木戸準一郎ノ許ニ投シ其衷情ヲ訴エタ
リ源藏モ亦諫メ遂ニ京師ノ旅館ニ留マリ
テ自又セリ佐渡ハ則チ速ニ藩ニ歸リ自ラ
藩兵ヲ率ヒ將ニ秋田ヲ攻メントシ君前ニ
命ヲ拜シ鼓噪シテ出テ去レリ
次郎之ヲ聞テ憤慨ニ堪エス身蟄居ニ在リ
ト雖モ陰ニ織笠四郎等ト内外謀ヲ通シ公

子英磨ヲ奉レテ秋田ニ走ラムト欲ス約ス
ルニ四郎ハ本道ヨリ走リ次郎ハ間道ヨリ
走ルヲ以テス而シテ其徒五十人皆兵甲ヲ
備ヘ以テ待ツ四郎公子ヲ奪ハレト欲スル
モ而カモ警衛太タ嚴ニシテ親近スルヲ得
ス四郎且ツ知ラカルマ子シテ日々其ノ隙
ヲ窺フ
佐渡進_レテ秋田ヲ攻メ轉戦皆捷テ將ニ城
下ニ迫ラレトス會々米澤藩降リ且ツ南部
藩モ亦降ルヲ勸ム南部藩之ニ從ヒ命ヲ佐
渡ニ傳テ佐渡乃チ藩兵ヲ收メテ旋ル次郎
義舉ノ計モ亦隨テ休ム
是ニ於テ南部藩謝罪使ヲ秋田ニ出タレ遣
ハシ鎮撫使ニ就テ情ヲ陳ヘ哀ヲ乞フ朝廷
乃チ目時隆之進ヲ擢レテ命シテ南部藩ノ
執政ト為ス隆之進一日次郎ヲ訪フテ曰ク
我レ朝旨ヲ以テ特ニ執政ニ舉ラル而カモ
衆ノ怨府トナリ局ニ當ルモ亦為スヘカラ
ス足下出ツレハ則チ大幸ナリ未タ知ラヌ
足下諾スルヤ否ヤラ諾スレハ則チ僕侯ニ

見エテ之ヲ計ラント次郎曰ノ諾但我レ難
ヲ避ケスト雖トモ而カモ吾子ハ朝旨ヲ以
テ執政トナル者我レ出ワルモ亦吾子ヲ扶
ケシノミト
後チ十餘日侯次郎ノ蟄居ヲ免シ且ツ參政
ニ任ス即夜鎮撫使ヲ追フテ直チニ函館ニ
赴キ以テ謝罪ノ事ヲ辨セシム横田隼之進
ヲ副使ト為シ山本寛次郎ヲ監督ト為ス一
行宮古港ニ到リシトキ會々榎本ノ軍艦ニ
艘宮古港ニ入ルアリ乃チ路ヲ轉シテ青森
港ニ出テ船ヲ僦フテ海ヲ渡リ遂ニ函館ニ到
ル鎮撫使ハ榎本ノ襲フ所トナリ己ニ逃レ
テ青森ニ歸ルヲ聞キ一行亦歸リテ鎮撫使
ヲ問フ而シテ鎮撫使ハ更ニ移リテ津輕ニ
アリ一行將ニ再ヒ之ヲ追ハレトセシニ藩
命シテ次郎ヲ召シ還ス次郎乃チ使命ヲ副
使ニ托シテ還ル
還レハ則チ藩ノ乱状猶ホ無政府ノ如シ目
時隆之進ハ則チ執政署ヲ設ケテ別ニ鎮撫
使館内ニアリ而シテ鎮撫使館ハ則チ城外

ノ旅館ヲ以テ之ニ充ク若シ隆之進ニ見エ
ント欲スル者アルトキハ必ス先ク鎮撫使
ニ見エ以テ許可ヲ得該鎮撫使ヲ藤川能登
ト曰ク澤三位ノ臣ナリ是ニ於テ次郎藤川
ニ見エント請フ左右乃テ腕刀ヲ命ス次郎
肯レセスレテ曰ク我レノ刀ヲ帶フル者ハ
寡君ノ命スル所ニシテ私帶ニ非サルナリ
若シ腕刀ヲ要スル須ク寡君ヲシテ亦改メ
テ之ヲ命マシムヘシト遂ニ刀ヲ帶セラ入
ル藤川其ノ亡状ヲ詰ル次郎對ヘテ曰ク我
レ目時ニ見エムカ為メニ来ルモノ鎮撫使
ニ見エムカ為メニ来ルモノ非ス且ツ今
日ノ事ハ實務ヲ辨スルニ在リ虚禮ニ拘ハ
ルナキモ亦可ナラスヤト藤川意解ケ乃テ
隆之進ヲ伴フテ出テ来ル隆之進次郎ヲ導
キ入り曰ク函館行ノ如キハ抑未ナリ何ヲ以
テ足下ヲ煩ハスニ足ラレ而シテ函館行ヲ
命スルモノ蓋シ足下ヲ逐フノ計ナリ僕ノ
知ル所ニ非サルナリ今足下ヲ召シ還カン
ルルモノハ即チ僕ナリ請フ足下侯ニ隨フ

江戸ニ赴キ以テ之ヲ輔佐セヨ僕モ亦尋
ヒテ赴キ以テ一藩ノ方向ヲ決セリト因テ
國事ノ語ヲ還ヘリタリ
次郎乃テ他ノ執政等ト侯ニ隨フテ江戸ニ
赴キシニ一行皆徒歩セリ獨リ侯ノニ輿ニ
乘ラレ秋田藩兵之ヲ警衛ヲ為セリ具ノ將
ヲ澁川内膳ト曰フ騎馬ニテ之ヲ導キ鎮撫
使藤川モ亦騎馬ニテ之ニ殿シ往キテ江戸
ニ到リ芝ノ金地院ニ入テ宿セリ然ル後君
臣皆禁錮ヲ命セラレ而シテ其ノ警衛亦秋
田藩ノ兵ヲ以テ之ヲ秋田藩ヲシテ其ノ
前辱ヲ雪キテ之ヲ快ウセシメラレタルナリ
一藩ノ運命ハ繫リテ謝罪ノ如何ニテ故
ニ此ノ際ニアリテ謝罪ヲ尤モ大事ト為セ
リ侯乃チ次郎ヲ擇ヒ托スルニ之ヲ以テシ
侯ニ代ハリテ京都ニ上ラレシメント欲ス次
郎先ツ官軍ノ參謀大山格之助ヲ訪ヒ以テ
藩情ヲ訴フ大山之ヲ諒トシ京都ヘノ紹介
書ヲ作シ之ヲ與エ且ツ目時ト相謀リ薦メ
テ執政ト為サシム次郎乃チ執政ヲ以テ謝

罪正使ト為リ參政富田哲副使ト為リ急ニ
京都ニ赴キタリ
次郎大津驛ニ到レハ則チ加賀藩兵嚴ニ関
門ヲ守リ入京ヲ許サス且ツ之ヲ拘留セリ
次郎面タリ守將ニ見ユ告クルニ其實ヲ以
ラセシカハ乃チ使ヲ京都ニ馳セラ之ヲ問
ヒレニ朝廷之ヲ許サル守將大ニ次郎ヲ饗
ミテ相送ル次郎己ニ京師ニ入ルモ而カモ
旅館皆拒ンテ宿セレノス當時東北人ヲ宿
スルハ官ノ嚴禁ニ係レハナリ京都三條ニ
越後屋五兵衛ナル者アリ曾テ南部藩人
為ノニ旅館ヲ開ク者亦嚴禁ヲ以テ之ヲ謝
ス次郎主人ヲ召シ實ヲ以テ之ニ告ケシカ
ハ主人乃チ一行ヲ邀ヘテ宿セシレ時ニ夜
半ヲ過クト云フ
次郎先ツ議定官池田侯ニ謁ス候ハ南部侯
夫人ノ弟ヲハ南部侯夫人並ニ池田侯
ハ俱ニ水戸烈公ノ子ニ次ニ參與官廣澤氏
ニ見エ又中山大納言澤三位等ニ謁ス池田
侯ハ其ノ公議人沖守固ヲシテ出テ次郎

ト表裏ヲ相為シ以テ諸事ヲ辨セシム遂ニ
謝罪書ヲ作リ辨事ヲ經テ上ル（辨事ハ位
參與ノ下ニ在リテ事務此ノ如キノ類ヲ掌
ルモノ）朝廷乃チ之ヲ許可セラレタリ次
郎更ニ朝廷ニ訴ヘテ曰ク臣入京ヲ許サレ
モ而カモ藩主ハ未タ許サレズ臣私ニ之ヲ
憾レ願クハ亦幸ニ藩主ノ入京ヲ許サレレ
コトヲト而レテ朝廷惟謝罪ヲ許ルニ入京
ヲ許ルサス曰ク奥羽ノ各藩主未タ京ニ入
ルモノアラズ且ツ藩主ノ措置ニ至テハ未
タ議定ニ及ハス是ヲ以テ朝廷獨リ南部藩
主ノミノ入京ヲ許スヲ得スト次郎對ヘテ
曰ク藩主已ニ罪ヲ免セラレトセハ則チ
入京ヲ許ルカハモ何ノ妨カ之レアラシ
若シ奥羽各藩ノ例ニ依テ論ヒラレナハ則
チ其罪ヲ免セラレハ何ノ謂ハレアルヲ
知ラス臣決シテ服スル能ハストテ死ヲ以
テ之ヲ爭ヘシカハ辨事等以テ然リトナシ
遂ニ朝廷ニ奏シ南部藩ニ限リ特ニ先ツ之
ヲ許ルカレタリ然レトモ南部藩ハ財政乏

レキヲ告テ藩主ノ入京ニ便ナラス其ノ賞
用少カラサルヲ以テナリ是ヲ以テ藩主遠
ニ京ニ入ラスシテ荏苒日ヲ度ル次郎之ヲ
憂ヒテ謂ラク我カ藩主ニシテ先ヅ京ニ入
ラスレト何ヲ以テ奥羽各藩ト相擇ハント
乃チ皇族ト婚シ以テ謝罪ノ實ヲ明サント
請フ廣澤參與等之ヲ賛成シ遂ニ藩主ノ長
女葦原宮ニ入ルヲ約セリ次郎既ニ使命ヲ
全ウシ且ツ宮邸ト婚ヲ約シ又藩ノ政署ヲ
京都ニ開ク而シテ富田哲及横田隼之助ヲ
留メテ以テ外交ノ任ニ當ラシメ然ル後自
ラ江戸ニ歸リ侯ニ見エテ復命ス
具ノ未タ江戸ニ歸ラサルヤ朝廷藩ニ命シ
テ首謀者ヲ出シ以テ一藩ノ罪ヲ負ハシメ
ラル藩乃チ楯山佐渡ヲ以テ之ニ對ヒ佐渡
誅ニ伏シテ以テ謝セリ目時次郎ニ見エテ
曰ク僕執政トナルモ令行ハレヌ願フハ是
下僕ニ代ハリテ藩政ヲ總理セラレヨト目
時ノ執政ハ本ト朝命ニ出ツ故ニ藩ノ君臣
ヲ擧ケテ殆レト與リ知ラサル者ノ如シ則

テ令ノ行ハレサルコト知ル可キナリ次郎
之ヲ諾スルモ而カモ其ノ執政ヲ罷ルルヲ
可カスレラ曰ク君ノ執政ハ朝廷ノ命スル
所豈ニ私情ヲ以テ罷ルヘケンヤト侯モ亦
次郎ニ告ケテ曰ク目時ニハ事ノ疑フヘキ
モノマノ故ニ執政ヲ罷ラテ東帰ル命セレ
ト欲スト次郎曰ク彼レ江戸ニアノヲ不可
ナラハ則チ東帰モ亦可ナリ但、未タ執政ヲ
罷ムヘカラサルノニ其レ朝命ノ尊キヲ如
何ンセント侯聞テ首肯セラレタリ次郎猶
ホ目時ノ自及スルコトアランヲ恐レ乃テ
藤森多一郎ヲ以テ目時附ト為シ常ニ目時ノ
身邊ヲ離レスンテ看護セシム目時ノ東帰
シテ黒澤尻驛ニ至ルヤ遂ニ客舎ニ於テ自
ラ屠腹シテ死ス曰ク我レ君國ノ為ニ計
リテ一身ノ為ニ計ラサハモ專横ノ罪ノ
如キハ則チ死シテ之ヲ謝シ以テ我カ心事
ヲ明ニセント朝廷他日時ニ目時隆之進及
中島源藏殉難ノ功ヲ賞シ俱ニ祭菜ヲ賜ヒ
ラレタリ

朝廷ノ府藩縣制ヲ創セラル、ヤ侯ノ長子
利恭任セラレラ藩知事トナル次郎ハ大參
事トナリ野田玉造安宅正路ハ權大參事ト
ナリ佐藤昌藏照井小作富田哲北田良友石
龜左司馬ハ少參事トナリ大田時敏南評伯
現家令
萩原是知華頂宮
前家令等數人ハ權少參事トナル
江戸ハ東京ト改稱セラレ次郎留テ東京ニ
在リ主トレテ婚禮ノ事ヲ理メ以テ華頂宮
ト南部家トノ親ヲ成セリ是ニ於テ知事ノ
姉郁子ヲシテ立テ王妃トナラシム次郎ノ
長女睢子年十二亦侍女トナリ隨テ宮邸ニ
入レリ
是レヨリ先キ朝廷ハ南部落ノ罪ヲ問ハレ
テ其南部二十萬石ノ舊祿ヲ沒收シ更ニ新
ニ之ヲ白石十三萬石ニ封セラレタリ藩ノ
君臣皆白石ニ移ルヲ欲セテ遂ニ獻金シテ
以テ南部ニ留メラレシト請フ朝廷乃チ獻
金七十萬圓ヲ命セラレタリ次郎獨リ之ヲ
非トシテ曰ク朝廷他日藩ヲ廢シ縣ヲ置ル
ヤ必セリ今白石ニ移リテ然ル後藩籍ヲ奉

還スルモ亦可ナラスヤ如何ヲ献金シテ以
テ南部ニ留マレコトヲ之レ願ハシ愚モ亦
甚シト謂フヘシ我藩現ニ金十八萬圓アリ
宜シク主トシテ之ヲ鐵道創設ノ資ニ投シ
以テ東北交通ノ便ヲ開クヘシ而シテ我知
事ヲ以テ之ヲ總裁トナサン且ツ鐵道ヲ創
設セハ朝廷特ニ其鐵道西側ノ地各十五間
ヲ賜ハル利モ亦尠ナカラズ彼是ノ得失思
フヲ知ルヘキナリト衆聽カス前侯モ亦泣
テ曰ク如シ郷ノ説ニ從ハシ我家ノ運命知
ルヘカラス卿復タ言フ勿レト次郎乃チ大
參事ヲ辞シ西ノ方京都ニ遊ヒタリ
次郎天下ノ形勢ヲ熟視シ以テ我レ率
頂宮ヲ奉レテ起タハ則チ以テ大ニ為スア
ルニ足ラン早ク洋行ヲ勸メ以テ其見聞ヲ
博メシメラルハニ如カスト遂ニ宮邸ト公
子英磨及次郎ト同シク海外ニ遊フヲ約シ
而シテ藩知事ニ就テ其寶物ヲ借り更ニ寶
物ヲ典シテ金五萬圓ヲ借り以テ洋行ノ資
ニ當テ旅装既ニ成レリ

會知事急ツ次郎ニ告ケテ曰ク献金ノ事約
ノ如クスル能ハヌ一ニ卿ノ力ヲ煩ハシ以
テ善後ノ計ヲ建テント次郎乃チ東京ニ帰
ル沖守固等次郎ニ勸ムルニ朝廷ニ仕フル
ヲ以テス松平春嶽時ニ民部卿タリ亦次郎
ヲ民部ノ大丞ニ薦ム而クモ知事ハ強ヒテ
次郎ニ請フニ難局ヲ濟フヲ以テセラル次
郎乃チ洋行ヲ罷メ又朝廷ノ仕ヲ辞シ再ヒ
大參事トナレリ此時朝廷ノ献金ヲ催スコ
ト甚ク急ナリ次郎先ツ岩倉右府ニ謁シテ
献金ヲ免セラレシコトヲ請フ右府一言ニ
之ヲ叱シテ曰ク何ヲ以テ敢テ朝廷ヲ欺ク
ト次郎對ヘテ曰ク臣主トシテ藩籍ノ奉還
ヲ唱フ夫ノ金ヲ献シ以テ舊封ニ居ルカ如
キハ臣ノ取ラサル所ナリ臣何リ敢テ朝廷
ヲ欺カン且ツ藩知事モ亦決シテ欺カス則
チ金十三萬圓ヲ献シ併セラ藩籍ヲ奉還レ
有スル所ノ封土ハ擧ケテ朝廷ニ歸セシト
欲ス其他ハ能ハスル所ニアラサルナリ故
ニ之ヲ免セラレント請フノミ若シ強ヒテ

之ヲ徵セラレナハ則チ南部藩ハ窮地ニ陷
ルノミ同ク是レ王臣ナリ何ヲ敢テ窮地ニ
陷ル、ヲ忍ハル、ヤ臣聞ク王者ハ人ヲ責
ムルニ其能クセサル所ヲ以テセスト是レ
臣ノ之ヲ免セラレト請フ所以ナリト右府
ノ曰ク善シ我レ條公ト俱ニ更メテ之ヲ聽
カント因テ期日ヲ約レテ條公ノ即ニ至ル
至レハ則チ三條岩倉、西大臣大久保大隈
ノ兩卿及ヒ廣澤後藤副島、三參議、列坐
シテ之ヲ待タル次郎陳請スルコト前ノ如
シ右府問フテ曰ク藩籍ヲ奉還スルノ事子
獨リ之ヲ唱フモ而カモ藩論ニシテ從ハス
レハ子將テ之ヲ奈何レセントスト次郎對
ヘテ曰ク臣カ躬或ハ死スルアラン而カモ
事ハ必ス成スヘント右府曰ク然ラハ則チ
之ヲ免セント次郎免状ヲ賜ハラント請フ
右府乃チ免状ヲ作りテ之ヲ與エラル次郎
免状ヲ拝受シ國ニ歸リテ復命セリ
前侯免状ヲ見テ喜ハル而カモ藩籍ノ奉還
ヲ吝マル次郎乃チ辭職セント請フ前侯遂

ニ諾シテ之ニ從ハル因テ藩ノ會議ヲ開キ
シニ士ノ大小聚マール者約三千人而シテ不
可トスル者僅カニ六人ノミ則テ議奉還ニ
決セリ是ニ於テ藩ノ君臣連署以テ願書ヲ
作レリ次郎乃テ其願書ヲ帶ヒ再ヒ東京ニ
上リ大隈卿ニ因テ之ヲ朝廷ニ上ル卿ノ曰
ク藩籍ノ奉還ハ寔ニ美譽タリ然レトモ我
佐賀藩及薩長土諸藩ノ如キスラ且ツ未タ
奉還セス而ルニ貴藩之カ首唱ヲ為スハ則
チ妥ナラサルニ似タリ姑ク時ノ到ルヲ待
タレヨト次郎可カスレテ曰ク弊藩曩キニ
汚名ヲ負フ故ニ些カ此ノ舉ナリトモ敢テ
諸藩ノ魁ヲ為シ以テ前辱ヲ雪カレトスル
ナリ卿ヤ何ヲ彼我ノ地ヲ易ヘテ其ノ哀情
ヲ察シ以テ速ニ之ヲ上ラサルヤト卿乃チ
之ヲ諒トシ遂ニ朝廷ニ上レリ而ルニ朝議
一變シテ直チニ之ヲ却下セラル曰ク此レ
詮議ノ次第アルヲ以テ遽ニ許ルスヲ得ス
ト次郎國ニ歸リテ之ヲ告ケ且言フ再願ス
レハ必ス其ノ志ヲ遂ラルヲ得ント前侯其

ノ許ルサレサルヲ幸トシ泣テ再願ヲ止メ
 ラレシモ次郎敢テ命ニ従ハス切ニ知事ニ
 説キテ之ヲ勸メシニ知事先ツ諾セラレシ
 カハ因テ再ヒ連署シテ強ヒテ之ヲ再願セ
 シニ朝廷之ヲ嘉ヒセラレ乃チ首トシテ之
 ヲ許ルサレタリ
 爾後三十餘日薩長土肥亦皆之ニ倣ヒ遂ニ
 各藩ヲ舉ケテ一齊ニ奉還セリ乃チ知ル藩
 籍ヲ奉還スルハ南部藩實ニ諸藩ノ魁タル
 シ而シテ次郎之カ首唱ヲ為セシナリ是ヲ
 以テ朝廷公債ヲ賜フノ時特ニ南部氏ノ功
 ヲ賞シ其ノ米價ヲ算シテ以テ公債ニ換フ
 ルニ郷價ヲ以テ計ラスレテ而シテ京價ヲ
 以テ計ラレ郷價ハ一石五匁十三匁ノ價
 十萬石ニ以テ計ラレ京價ハ一石八匁
 百零四萬石ノ多ク價ハ上レノ故ニ祿ハ罪ノ
 以テ十三萬石ニ削ラレタルモ而カモ公債
 ハ功ヲ以テ却テ元ノ二十萬石ヨリモ過キ
 タリ前侯次郎ヲ見テ謝セラレテ曰ク此レ
 卿ノ賜ナリ我レ公債ノ五分ノ一若クハ四

分ノ一ヲ頒テ汝ニ與フルモ亦可ナリト次
郎對ヘテ曰ク臣公家ノ為ニ計ルノニ豈
ニ私利ヲ計ルモノナラシヤト蓋ニ次郎ノ
此ノ擧ノ功ハ常ニ南部氏ノ之ヲ多トセ
ラル、ノニニアラサルヘシ
南部藩ノ献金ニ因シムヤ大坂ノ留守居川
井清藏ヲシテ洋人ニ就キ金參拾万圓ヲ借
リ以テ献金ノ用ニ充テレシメントス次郎献
金ヲ免セラル、ノ後清藏ヲシテ之ヲ還ハサ
シメレト欲ス清藏曰ク今遽ニ之ヲ還ヘサ
ハ則チ罰金三萬圓ヲ添フルヲ要ス故ニ暫
ク我ニ托シ以テ貿易ノ業ヲ營ミシメテ
レヨ我レ則チ利ヲ獲テ之ヲ還ヘスヘシト
次郎之ヲ聽ルシ遂ニ清藏ニ托ス清藏乃チ
盛岡藩物産商會ナル者ヲ設ク以テ盛岡産
物ヲ聚メテ大坂ニ送リテ以テ販賣セシム
即チ銅米及海産物等是レナリ商會々長ハ
則チ村井茂兵衛ヲ以テ之ニ任シ而シテ清
藏ニ自ラ監督ヲ為シ以テ營業ヲ開始セリ
然リ而シテ資金ハ漸次多キヲ加ヘシカハ

借款ハ遂ニ百五十萬圓ノ多キニ至レリ業
務之ニ隨ッテ亦大ニ擴張セテ輪船二艘
ヲ購有ス曰ク神通丸子約噸曰ク通才丸上今横
濱大改ノ間ニ米往シテ以テ貨客運輸ノ用
ニ供ス又米ノ低價ヲ見レハ則テ之ヲ買收
シ高價ナレハ則テ之ヲ發賣シ貯ル所ノ
米常ニ十三萬石アリ銃ノ賣買モ亦然ノ銃
ハ則チ常ニ貯ヘテ七萬挺アリ次郎以為ラ
ク我レ常ニ銃ト米トアレハ則チ天下ノ變
ニ應シテ以テ大ニ為スルニ足ルル岩

崎彌太郎等モ亦資金拾萬圓ヲ以テ九十九
商會ヲ創設ス而シテ同ク銃ト米トク高ノ
若シ資金ノ足ラサルコトアレハ則チ物産
商會ニ就テ之ヲ借ル例トス故ニ彌太郎
ハ時ニ次郎ヲ訪ヒ以テ其眷顧ヲ請ヘシト
云フ今日ノ三菱會社ハ則チ其ノ九十九高
會ノ後身ナリ當時物産商會ノ盛ニシテ
而シテ次郎ノ榮ハ一時ノ快ト曰フト雖モ
豈ニ亦偉ナラズヤ

物産商會ハ廢藩置縣ノ後藩ノ一字ヲ削リ

盛岡物産商會ト曰ヘリ商會ノ偶金壹万五
千圓ヲ借ルニトアリシニ債主其ノ契券ニ
就キ縣ノ一字ヲ入ルヲ請フ時ニ田中愛
之輔縣ノ少属ノ以テ商會ノ會計ヲ辦理シ
ツ、アリ獨斷スル之ヲ諾セリ是ニ於テ他
ノ債主等皆争テ之ニ倣ヒシカハ藩債ハ轉
シテ縣債トナリ了ハレリ事大藏省ニ聞ユ
大藏卿大隈重信ハ急ニ次郎ヲ召シ其縣債
一切ヲ舉ゲテ中外ノ債主ニ償還シ以テ累
ヲ國庫ニ及ホスナカテシム次郎之ヲ然リ
トシ乃チ商會ノ資産ヲ處分シテ之ヲ現金
ニ換ヘ以テ縣債ノ償還ニ務メシモ而カモ
尚残借款十五萬圓アリテ償還スル能ハス
次郎大隈卿ニ見エテ事情ヲ具陳シ大藏省
ノ商會ニ代ハリテ之ヲ償還センコトヲ請
フ卿固ク執ラ可カス次郎説テ曰ク朝廷ニ
テハ藩ヲ廢シ縣ヲ置カレナハ則チ藩債ノ
轉シテ縣債トナルハ固ヨリ當然ノ理ナリ
朝廷惟藩ノ土地人民ノミヲ收メテ藩ノ債
務ヲ知ラスト曰ハレテ可ナクヤ且ツ幣

藩歸順ノ日ニハ己ニ金七萬圓ヲ徴セラレ
藩ニ復スルノ日ニハ又金十三萬圓ヲ獻シ
テ合計金貳拾萬圓ハ皆納メテ朝廷ニア
ルモノナリ朝廷則チ其ノ十五萬圓ヲ以テ
縣債ヲ償還セラレトスルモ而カモ尚金
五萬圓ヲ剩スヘシ曾テ毫モ失フ所マラス
何ノ不可リ之レテラント卿遂ニ之ヲ諾セ
ラル乃チ特ニ金十五萬圓ヲ支出シテ次郎
ニ交付シテ以テ清算セシメラル此レ則チ盛
岡物産高會終ハリナリ當時高會ノ經營ニシ
テ宜シキヲ得ハ則チ今日ノ三菱會社トナ
ルモ亦未タ知ルヘカラス惜イカサ
次郎ハ其ノ清算事務ヲ擧ケテ高島嘉右衛
門ニ一任シ金十五萬圓ヲ托シテ以テ便宜
洋人ニ償還セシム而ルニ嘉右衛門ハ決シ
テ之ヲ一時ニ償還セス三歳ノ久シキ亘テ
私ニ之ヲ利用シテ以テ京濱鐵道ノ工事竣成
ノ金融ニ供シタリ其ノ今日ノ富ヲ成セレ
モノハ亦此ノ工事ノ竣成ニ基ツケリ則チ
銚道兩側ノ地各十五間ニ對シテ換地ヲ賜

ハリタルヲ以テ茲ニ新ニ町ヲ開キタリ謂
ユル高島町是レナリ次郎曩ニ藩主ニ勸ム
ルニ東北銚道ノ創設ヲ以テシタルハ亦當
時ニ在テハ特ニ沿道ノ地ヲ賜ハルノ制ヲ
リテ以テ大地主ト為ルヲ得ルカ故ナリ藩
主ハ次郎ノ説ヲ聽カレサリシモ而カモ嘉
右衛門ハ之ヲ京濱ニ行ヒ以テ巨萬ノ富ヲ
致セリ嘉右衛門ノ如キハ利ニ喻ルモノト
謂フヘシ

朝廷ノ盛岡藩ヲ廢レテ盛岡縣ヲ置クヤ
後

ト岩手縣 渡邊昇リ以テ知事トシ次郎ヲ大

參事トス而シテ知事ニ任ニ赴カスニテ次

郎ニ之カ代理ヲ命セラル次郎辭シテ曰ク

藩藉ノ奉還ハ我レノ首唱ニ係リ而シテ今

命ニ從ハ、恐クハ舊藩ノ衆人我カ心事ヲ

疑ヒ縣治舉ラヌ却テ朝旨ニ負カント朝廷

因テ次郎ヲシテ其代ハル可キ者ヲ選ハシ

ム次郎乃チ野田玉造ヲ薦メシカハ玉造ヲ

ハ權大參事ヨリ進メテ大參事トシ遂ニ

知事ニ代ハリテ以テ縣政ヲ總ヘシメラル

而シテ次郎ノ辭職ヲ許ルサレズ亦大參事
ヲ以テ東京ニ遊ヘリ其後次郎固辭スルモ
聽カレズ玉造ノ罷メテ而シテ島惟精ノ縣
知事ト為ルニ及テ始メテ次郎ノ辭職ヲ許
ルナレタリ時ニ明治五年ニシテ次郎年三
十八
次郎曩ニ華頂宮及公子英磨ニ隨フテ海外
ニ遊ハント欲セシモ而カモ獻金ノ事ヲ以
テ再ヒ大參事ニ任セラレ尋ヒテ商會ノ事
ヲ以テ三歲多事而シテ又縣ノ大參事ニ任
シテ久シク東京ニ留マル是ヲ以テ未タ遠
遊ニ暇アラサリキ今其ノ閑地ニ就クヤ洋
行ノ資ハ已ニ知事ノ徵スル所トナリテ而
シテ復タ獲ル能ハス遂ニ洋行セスニテ止
ミヌ次郎常ニ以テ憾トセリ是レヨリ先キ
華頂宮ハ宮室費ヲ以テ公子英磨ハ南部家
貴ヲ以テ俱ニ海外ニ遊ハレタリ宮邸ニ隨
フ者ハ僧ノ賢勝ト其臣井上定之藤森主一
郎ナリ主一郎ハ初メ次郎ノ家臣ナリシモ
宮邸ノ愛スル所トナリ遂ニ宮邸ニ仕フル

者ナリ公子ニ隨フ者ハ其臣奈良真志トス
次郎ノ選フ所ナリ而シテ一行ノ旅費ニシ
テ其ノ私消ニ係ルモノハ皆次郎ノ内助ニ
頼ルト云フ皇族ノ海外ニ游ハル者實ニ
華頂宮ヨリ始マレリ而シテ此レ次郎ノ勸
ムル所ナリ官邸ハ游學三年ニシテ病ヲ以
テ帰朝セラレ公子ハ酒色ニ溺レテ帰ラレ
二人皆志ヲ遂ケラレサリキ華頂宮屢次郎
ノ邸ニ游ハレ或ハ其邸ヲ借リ或ハ其邸ヲ
買ハレラ恩寵淺カラス交リ水魚ノ如シ王
妃ハ即チ南部侯ノ女家令ハ即チ南部侯ノ
臣良真皆次郎ノ薦ムル所而シテ長女睢子
モ亦王妃ノ左右ニ侍セリ其ノ恩寵ヲ辱ウ
スルモ亦宜ナラスヤ然リ而シテ官邸ハ幾
ハクモナク薨去セラレタリ次郎既ニ高會
ノ倒産ヲ嘆シ又官邸ノ薨去ヲ悼ムコト、
ナレリ是レ實ニ次郎ノ二大不幸ナリ
明治七年征臺ノ役ニ大隈重信ハ臺灣事務
總裁ニ任セラレタリ次郎總裁ニ見エテ説
テ曰ク此役ニ延ヒテ征請ノ役トナラハ則

子自ラ舊南部藩士五百人ヲ率ヒ攻メテ清國ニ入り以テ其一地方ヲ擾ラン請フ之ヲ賛成シ與フルニ便宜ヲ以テセラレヨト總裁乃チ之ヲ岩倉右府ニ聞ス右府ハ直ニ之ヲ嘉納セラレタリ是ニ於テ次郎ハ右府ノ旨ヲ受テ自ラ隊長十人ヲ選ビ留マリテ東京ニ在リ以テ命ノ下ルヲ待テリ次郎又西郷都督ニ詭キ托スルニ織笠四郎杉村濬人評皆南ヲ以テシ俱ニ征臺ノ軍ニ從ハシム而シテ自ラ私費ヲ以テ更ニ佐藤昌蔵藤森主一郎南ニ人ホヲ隨フテ上海ニ到テ以テ視察ス然リ而シテ清國ハ責ヲ負フヲ遂ニ征臺ノ費金五十萬元ヲ償ヒ以テ和親ノ約ヲ結ヘリ我全權大使大久保利通ハ歸リテ上海ヲ過リ次郎乃チ大使一行ニ加ハリ其坐乗ノ軍艦ニ便乘シテ亦歸レリ但昌蔵ハ上海ニ留マリ尚ホ事情ヲ究メント欲ス次郎乃チ費ヲ給シテ之ヲ留ム昌蔵留マルコト一年ニシテ亦歸ル

次郎ハ清國ノ久シク聖王ノ道ヲ廢スルヲ

熟視シ以為ラク清國ヲ改造シ以テ萬世ノ
 功業ヲ建テシハ革命以テ民心ヲ一新ス
 ルニアラサレハ不可ナリト遂ニ再ニ清國
 ニ游ハント欲ス時ニ森有禮清國全權公使
 ニ任セラレ、ヲ聞キ乃チ公使ニ説キ托ス
 ルニ金子彌平ヲ以テシ南官費ニテ北京
 ニ游學セシム又參議黒田清隆ヲ説キ其
 ノ内命ヲ受ケ亦政況視察ノ名ヲ以テ官費
 ニテ自ラ北京ニ游ヒ日々大官名士ト來
 往談論ヲ事トセリ公使ノ姪ニ伊集院兼良
 ナル者アリ鹿見人亦北京ニ在リテ游學ス次
 郎一日兼良ト相語リ遂ニ肝胆ヲ傾ケ次郎
 彌平、兼良ノ三人ハ約スルニ兄弟ノ義ヲ以
 テレ次郎ト與ニ大ニ為スアラント誓フ彌
 平兼良先ニ蒙古ニ入り以テ同志ノ士ヲ索
 ヲ次郎ハ則チ北京ニ在リテ互ニ消息ヲ通
 セリ而シテ蒙古行ノ費ノ如キハ次郎亦之
 ヲ補助セリ當時次郎ハ官給ヲ受クル者月
 額金參百圓餘而シテ交際ノ費ノ如キハ別
 ニ寶費ヲ以テ之ヲ受ケ故ニ能ク他ヲ補助

スルヲ得タリト云フ次郎ノ北京ニ游フヤ
己、三歳ヲ經タリ官乃テ次郎ヲ召シ還ヘ
セリ而シテ彌平兼良モ亦歸朝セリ
明治十二年清國ハ韓國ノ大院君李是應ヲ
拘引シ以テ天津ニ赴キ更ニ保定府ニ移シ
テ嚴ニ之ヲ禁錮セリ我外務省之ヲ聞キ乃
チ次郎ニ命スルニ其實況ヲ視察スルヲ以
テシ而シテ清水元一郎ヲ伴フテ同行セシ
メラル元一郎ハ留テ清國天津ニ在リ而シ
テ自ラ保定府ニ赴キテ總督ノ幕友等ト交
游シ一夜清國官人ニ假裝シテ其禁錮ノ室
ニ到リ親シク院君ニ見ユ且ツ小照ヲ得テ
歸ル其後次郎ハ本省ヨリ召シ還ヘサレ而
シテ七等出仕ヲ以テ更ニ韓國釜山ノ在勤
ヲ命セラレタリ次郎ノ任ニ赴クハ其ノ志
ニ非サルナリ乃テ釜山ヨリ上書シテ曰ク
芝罘ハ山東省ニマリテ渤海湾ニ臨シ清韓
ノ往來出入ニハ必ス此ノ港ヲ經由セサル
ハナレ故ニ事アルノ日ニハ此港尤モ重要
ノ地タリ英國ハ既ニ領事館ヲ開キシモ而

アモ我國ハ未タ之レアラズ願クハ我モ亦
領事館ヲ此港ニ開キ以テ小官ラレテ乏シ
キヲ受ケテ以テ領事ノ任ニ當ラシメラレ
コト本省未タ答ヘス次郎則チ命ヲ待タス
レテ歸リ且ツ外務太輔吉田清成ニ見エラ
之ヲ説ケリ外務卿井上馨乃チ次郎ニ命レ
任ニ芝罘ニ赴キ以テ領事館ヲ開カシム且
ツ内旨ヲ傳ヘテ曰ク領事ノ吏務ハ書記生
ラシテ之ヲ執ラシメ君ハ則チ心ヲ政局ニ
留メ以テ大要ヲ報セヨト次郎自ラ書記生

上野專一人大村ノ選ニ學生畠山三郎南野白
井新太郎倉田ト與ニ先ツ芝罘ニ赴キ以テ
創設事務ヲ執ラシム已ニシテ次郎到リ旭
旗ヲ渤海湾頭ニ翻カサシム時ニ明治十六
年次郎年五十一次郎領事館ヲ芝罘ニ開キ其ノ事務ヲ舉ゲテ專一ニ
一任シ而シテ自ラ清國ヲ改造スル事ヲ慮
リ私ニ革命黨負ヲ招キ時ニ密談夜ヲ徹ス
ルアリ三郎之カ通譯ヲ為シ次郎ハ則チ新
太郎ト之ヲ聞キ或ハ筆ヲ以テ舌ニ代フル
アリ而シテ書記ハ毫モ與リ知ラス又英人

ヲ聘シテ顧問ト為セリ而シテ官給足ラス
乃チ私賞ヲ以テ之ヲ補ヒフ、アリ又清人
ヲ聘シテ顧問兼清語教師ト為セリ此レ皆
私賞ヨリ出セリ其錢ヲ愛セスレテ人ヲ愛
スルコト此ノ如シ[△]此時ニ當リ清國ハ法國
ノ寇ヲ防クニ急ナリ其南洋水師ノ如キハ
一撃セラレテ全ク殲キタリ法將孤拔^ハ又
澎湖島ヲ取テ之ニ據リ將ニ北上シテ以テ
天津ヲ衝カントス次郎曰ク清國ヲ改造ス
レハ此ノ時ヲ然リト為ス則チ清廷ハ内顧
ニ暇アラスシテ革命軍ノ起ルニ便ナルカ
為メナリ而シテ革命軍ハ宜シク諸外國ト
交渉シテ以テ友誼ヲ保テ決シテ毫モ干渉
ヲ受クルナカルヘシト日夜新太郎等ト草
命ノ方策ヲ講究セリ

海軍大尉曾根俊虎^ハ人禾沃上海ニ駐在シ陸
軍中尉小澤豁郎^ハ人諏訪福州ニ駐在シ亦皆
清國ヲ改造スルニ志アリ俊虎ハ豁郎ノ兵
ヲ福州ニ擧ケントスルヲ見テ遲疑決セス
豁郎怒リテ俊虎ト謀ラス而シテ次郎ニ書

ヲ寄セテ曰ク我將ニ兵ヲ福州ニ舉ケント
ス足下モ亦貴地ニ起レヨ南北相應シテ特
角セハ則チ清國ハ得テ覆^スヘキナリト蓋
シ豁郎ハ兼テ次郎ノ人トナリテ聞キ居タ
ルヲ以テノ故ニ突^トシテ舉兵ノ事ヲ勸メ
シナリ次郎新太郎ニ告ケテ曰ク豁郎ハ好
漢與ニ事ヲ謀ルヘシ未^ク舉兵ノ實如何ヲ
審ニセス子往テ之ヲ視ヨ可ナレハ則チ之
ヲ諾シ不可ナレハ則チ止メ輕舉以テ大事
ヲ誤ラシムルナレ要ハ其兵備果シテ能
ク具ハルヤ否ニ在リト
新太郎命ヲ受ケ往キテ上海ニ到レハ偶^ニ陸
軍中尉柴五郎會津ト相會フ五郎ハ新太郎
ヲ疑フテ豁郎ノ黨トナスモノ、如シ新太
郎ハ之ヲ察シ説クニ輕舉ノ不可ヲ以テセ
レリハ五郎大ニ喜ビ之ヲ陸軍少佐島弘毅
人^士佐ニ告^テ弘毅ハ即チ上海ニ在リテ豁郎
等ヲ監督スル者ナリ因テ新太郎ヲ招キ囑
スルニ具^ニ柴ト與ニ豁郎ヲ諫ムルヲ以テ
ス新太郎之ヲ諾シ遂ニ柴中尉ト同ク福州

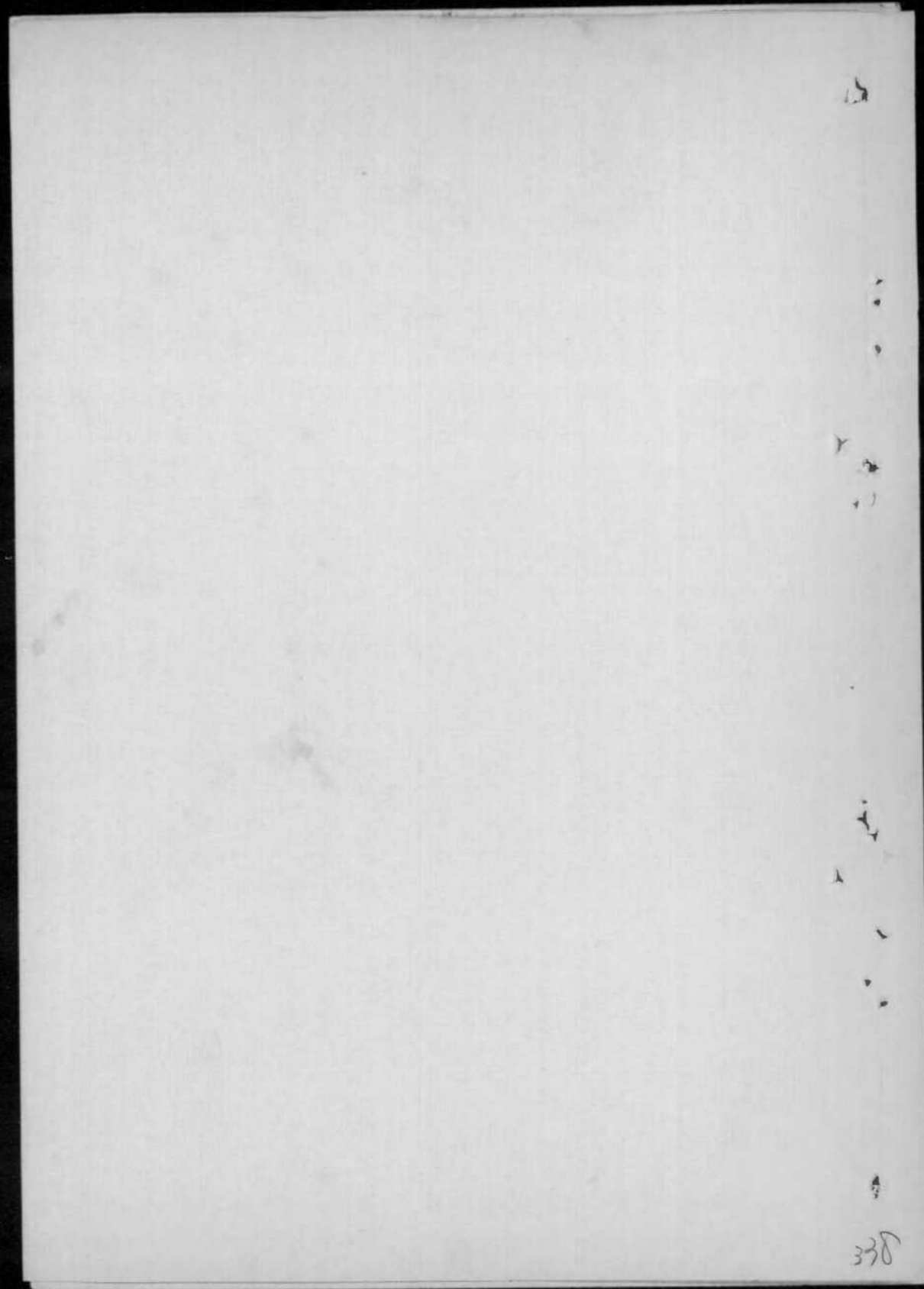
赴ケリ和泉邦彦鹿兒島人後テ衆樽井
 藤吉院大和兼負トナル等數人亦皆同船之
 赴ヲ益シ皆豁郎ノ檄ニ應シテ来ル者ナリ
 豁郎ハ一行ヲ歡迎シテ意氣大ニ昂ル柴中
 尉先ツ豁郎ヲ見テ告ケテ曰ク參謀本部ハ
 軍艦ヲ派シテ君ヲ捕ヘント擬ス警視廳モ
 亦君ノ擧ニ加ハル者ヲ檢シ或ハ東京ニ於
 テ之ヲ捕ヘ或ハ長崎ニ於テ之ヲ捕エタリ
 其ノ来リ投スル者ハ幾ハクナレ則テ兵ヲ
 擧タルト雖トモ何ノ勝算アラント固ク豁
 郎ヲ諫ム豁郎聽カス尚ホ兵ヲ擧ケント欲
 ス乃チ新太郎等ヲ延キ戸ヲ閉チテ議ヲ開
 リ豁郎曰ク輪船ニ艘泊シテ閩江ニ在リ此
 レ取テ以テ我用ニ當ツヘシ又米數百石ハ
 貯ヘテ某山寺ニ在リ此レ取テ以テ我食ニ
 當ツヘシ而シテ清兵中混シテ哥老會負
 リ其數多キニ居ル私ニ我レト相約ス我レ
 一ニ起テハ則テ彼等皆内ヨリ起テ以テ我
 レニ應ヒレ此レ亦取テ以テ我兵ニ當ツヘ
 シ我レ閩江ノ戦ヲ睹ルニ既ニ清兵ノ能ク

為スナキヲ知ル一呼シテ起タハ則チ十八
省ヲ席卷スルハ疾風ノ枯葉ヲ捲クカ如ナ
ルコト必セリト新太郎曰ク然ラス苟モ貴
説ノ如クンハ此レ則チ客ヲ以テ主ト為シ
無ク以テ有ト為ス者皆不可ナリ且ツ清國
ヲ改造セシト欲セハ清人ヲ主ト為シ我レ
客ト為リテ之ヲ扶クルニ如クハナシ是レ
道ノ順ニシテ策ノ得タル者ナリ哥老會ノ
領袖果シテ君ト盟約スルテラハ則チ彼等
ヲシテ先ヲ起タシメ然ル後我レ之ニ應レ
テ可ナリト豁郎曰ク彼等主ト為スニ足ラ
ス且ツ我レ先ツ起タスレハ則チ彼等モ亦
敢テ起タスト新太郎笑テ曰ク此ノ如キノ
輩ハ何ヲ與ニ大事ヲ謀ルニ足ラン君必ス
中止シテ以テ時機ヲ待テト邦彦等亦中止
説ヲ取レリ是ニ於テ豁郎始メテ衆ニ告ク
ルニ大事ノ中止ヲ以テシ且ツ新太郎ニ告
ケテ曰ク官ハ我レヲ捕ヘント欲ス亡クテ
東氏ノ許ニ至ラハ請フ匿シテ之ヲ舎セヨ
ト新太郎之ヲ諾ス而シテ衆皆散シ去レリ

新太郎芝罘ニ歸テ復命ス次郎之ヲ聞キテ
其ノ中止ヲ稱シ且ツ私ニ密郎ノ亡命ヲ匿
クスヲ諾ス幾ハクモヲクシテ陸軍大尉福
島安正ハ北京公使館ヨリ来リテ芝罘領事
館ニ宿ス次郎告クルニ密郎ノ事ヲ以テシ
且ツ大尉ニ囑シテ參謀本部ノ特ニ之ヲ寬
假センコトヲ請ハシム本部ハ乃チ密郎ヲ
シテ香港ニ轉任セシメテ止ミタリ
此ノ年伊藤大使ト西郷副使トハ俱ニ軍艦
ニ乘リ来リテ芝罘ニ泊シ將ニ北京ニ赴キ
以テ清國ノ罪ヲ問ハントス清兵ノ韓國京
城ニ在ル者我守備兵ト開戦シタルカ故ナ
リ清國ハ法國ト交戦中ナルニ今又我レト
開戦セハ乃チ腹背敵ヲ受クル地ニ立リ
者加フルニ國內叛徒ノ潜伏多キヲ以テシ
テ國勢愈危シ而ルニ法國ハ既ニ遠征ヲ倦
ミテ和ヲ議スルニ意アリ未タ其機ヲ得ス
シテ荏苒日ヲ送レリ適日清ノ開議ヲ見ル
ヤ直ニ清國ト和セリ我國モ亦隨テ和シテ
退キタリ謂ユル天津條約是レナリ是ヲ以

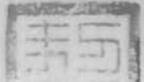
テ清國ハ自大自尊列國ハ皆清國ヲ畏レ而
シテ革命黨モ亦皆潜伏セリ金子彌平伊集
院兼良及ヒ曾根俊虎等皆曰ク清國ノ大勢
既ニ定マレリ革命ハ復々望ムヘカラスト
次郎曰ク清國ヲ改造センニハ聖王ノ道ヲ
明カニスルヲ以テセハ足レリ則チ世界的
模範國家ヲ作ルニ外ナラス何ヲ必スシモ
革命ヲ之レ期セシ且ツ清帝ヲ扶ケテ以テ
為ス者ハ經ナリ革命ヲ以テ為ス者ハ權ナ
リ權ハ已ムヲ得サルニ出ツ固ヨリ善ノ善
ナル者ニアラスナリト尚ホ清國ニ留マ
リ以ツテ大ニ為スアラレトセリ而シテ石
川儀平南都来リ宿シ亦密議ニ與ル熊谷直亮
モ熊本亦来リ游學セリ来リ密議ニ與ラサ
リキ
次郎任ニ赴キテ已ニ三歳ヲ経タレハ官乃
チ例ニ依リテ次郎ヲ召還ス次郎帰リテ長
崎ニ抵リ直チニ辞表ヲ上リテ隠レ去リ復
タ本省ニ趨キテ再ヒ長官ニ見エヌ其志ノ
高潔知ルヘキナリ時ニ明治十九年ニシテ

次郎年五十四爾後江湖ニ落拓セシヒ貧ニ
 シラ憂ヘス老テ益々壯ニナリ自ラ花卉ヲ栽
 エテ優悠自適或ハ山水ヲ畫キ或ハ客ト棋
 ヲ圍ニ頗然トシテ遂ニ京寓ニ老_フキリ
 次郎ノ妻ハ楯山氏生後南部侯ニ養ハレ待
 ヲニ侯女ヲ以テセラル後侯命ニ因テ之ヲ
 娶ル先ツ卒ス嫡子政徳出テ、米國ニ遊フ
 政徳ノ妻ハ南部氏前侯_{甲斐守}ノ女ナリ亦先ツ卒
 ス長女睢子ハ津田静一人_{熊本}ニ嫁シ次女恵
 子ハ白井新太郎_{後富士水電株式}ニ嫁ス後
 野村氏ヲ娶リ三男アリ曰ク震吉陸軍少尉
 曰ク敏吉藥劑師曰ク敏吉中學校ニ在リ次
 郎晩年其家系ノ明カテラサルヲ恐レ乃チ
 家譜ヲ出シ且フ南部伯爵ニ之カ證明ヲ請
 ヒ遂ニ氏ヲ復シテ南部ト曰ク而シテ養老
 ノ資ハ則チ宗家南部伯爵及ヒ白井金子兩
 氏并ニ外孫津田信卿ヨリ之ヲ補助スト云
 フ



338

裏面白紙



五三丁

丙
一三三

別紙位記並辭令及廻送候也

明治四十五年三月四日

宗秩寮總裁侯爵久我通久

從五位南郡次郎

宮内省

裏面白紙

338